

歴代の編集者の苦心と努力がそれを支える力であったことも事実である。

物性研究10周年に寄せて

九大・理 松田博嗣

先ず「物性論研究」に載せてみる。出した論文に自信がもてれば、英文にしてプログレスかジャーナルに投稿する。 — 私が大学学部を出た1951年頃には、多くの研究者は「物性論研究」をそんな雑誌のように受け止めていたと思います。毎号かなりの投稿があり、当時の物性研究者の数から考えると、「物性論研究」を利用する人の割合は相当高かった — むしろ物性論研究者の機関誌であったとも云えるでしょう。

1953年には、国際理論物理学学会が戦後日本での初の国際会議として華々しく開かれていましたが、この頃から多くの研究者、殊に固体論の研究者の目はますます海外に惹きつけられた様に思います。それは単なる知識の吸収源としてでなく、自分の研究が海外から認めてもらって国際的に活躍したい。その場として海外を見るようになってきました。実際当時の欧米と日本との研究条件の差、特に経済的な差は絶大なものでした。「物性論研究」に載せて安心してしまつて英文にするのを怠けていると損をする。priorityを主張出来なかったり、海外から認めてもらえなかったり、ideaを取られたりするだろう。それに国内での研究会は頻繁に開かれるようになり、同じ分野の研究者間の討論、交流に事欠かないようになると、ますます研究者は直ちに英文雑誌に論文を投稿するようになってきました。

その結果、こうした主流的ムードからはみ出たような分野の論文が多く載るようになってきました。その頃は高分子物理など、ごく少数派で、その方面の研究発表に「物研」が利用されたことを記憶しています。一時はそんな投稿のため頁数が多くなり過ぎて、編集部よりの注意があったこともありました。しかし、それも風に吹かれて消えるローソクがいつとき明るくなるようなもので、永宮研の編集の後を継がれた山本さん、富田さんの御努力にも関らず、遂に「物性論研究」は毎月出せるような投稿がなくなり、自

然消滅的に休刊になりました。それは終るべくして終ったとも云えましょう。

しかし、面白いことに、アンケートなどを取ると、「物研」のようなものはやはりあった方がよいと云う意見もかなり根強くあります。これに応じて碓井さん、長岡さんに今までの投稿を待つと云う受身の編集から、編集会議も毎月開き積極的に論文を集める姿勢を打出されました。名前も「論」を取って実験家からの投稿も大いに期待しようとするのであったと思います。表紙も美しく、掲示板、基研研究会報告などを加えて大いに新味を出されました。この後を受けついで私が発行人になったのは1966年4月で、編集、刊行の基礎は定まっておりましたが、やはり自発的な投稿は少く薄いページ数の号が続くと云った状態でした。やがて米沢さん、武野さんが基研に着任し、他に川崎（辰）、岡田、西川、蔵本、村尾、本間、小田垣、垣谷さんらがつぎつぎ編集陣に加わって、色々特集、講義録など新機軸を出して何とか会費に見合うような読みごたえのあるものを出そうと毎月頭をひねったり、投稿が少いと歎いたりしたことでした。米沢さんは編集長として特に積極的に時間を費して努力しました。たとえば全共斗運動が活潑であった頃、大学問題特集などを推進し、商業誌に見られないような特徴を出すことが出来たのも彼女の推進力に負う所が大きいと云えます。もっとも当時は余り推進力が強すぎて行き過ぎないかと、はらはらさせられたこともありました。実際、編集方針や、新しい編集員の人選方法（これは私の責任でお願いすることにしていました。）に疑問をもたれて辞任を云い出された編集員も出ました。

私はこれまでの「物研」の辿った道や、周囲の状況から考えて、かつての永宮研編集時代のいわば物性研究の「表文化」的な役割を取戻すことは今の本誌の性格上無理で、むしろ「裏文化」的な特徴で行こうと思っていました。しかし裏は強力な表に対して独立性を主張し、胸を張って生活するところに意義があるのであって、表を不倶戴天の敵としてしまったのでは元も子もなくなります。第一メービウスの環のように、表と裏は固定的に考えるべきではないでしょう。残念ながら上記の辞任を慰留することは出来ませんでした。幸いこのような事が大事とはならず「物性研究」を続けることが出来ました。

米沢さんの後には垣谷さんが編集長となって熱心に編集、刊行に力を注いでおられますので、九大へ転任して名ばかりの発行人となりましたが、その名も遠からず基研に着任される川崎恭治さんにバトンタッチ出来ることと考えています。

裏文化としての「物性研究」を支えているのは、時流に乗っていない研究者、研究場で云えば恵まれない、いわゆる地方の研究者であろう。こう云う人達の意見を汲み上げ、編集面に反映させて行くために、「地方編集員」とか「地方だより」のようなものを作ってはと云う意見が出ました。しかし編集部のある京都も地方であろうし、別にわれわれは、地方のために何かしてやろうと云う指導者的な意識をもってもいないので、「各地」と云う名を付けることにし、中央的な所におられる方にも各地編集員をお願いすることにしました。これはかなりよい制度だと思っています。

それから編集上の一つの基本問題として議論されたのは「物研」に載せられた研究論文の priority の問題でした。priority を主張し得る雑誌としての性格を打出して行くべきかどうかで、研究部員会などでも大部議論があり、結局は今まで通りの性格の方がよいと云うことに落ち着きました。しかしそれだからと云って、物研に出た論文を知っていながら、正式の雑誌の論文ではないからと無視するのは研究者のエチケットとして厳に慎しむべきことでしょう。

われわれの生活環境は急速に変わりつつあります。研究環境また然りです。現時点では一見意義が疑われるような研究の中にも、やがては大いに重要なものに結びつき得る研究もあるでしょう。立場は多様性によって環境の変化に堪えて現在まで生き残る種を残したとも考えられます。現在「物性研究」のように変り者に開かれた雑誌は物性の分野には余りないのではないのでしょうか。どうか読者の財布に大きな負担とならない程度に色々な論文、意見が受け入れられる雑誌として生き残ってほしいと思います。

「物性研究」の財政は、機関会員には個人会員より大きい会費を負担してもらう制度を碓井さんが導入され、会計の中島さんの努力や印刷所の協力、それに投稿の少なかったせいもあって、一時は黒字の使い道の試みとして懸賞論文などを募集したこともありました。しかし最近ではインフレのため、印刷所との交渉に当たっている垣谷さんや、安いアルバイト代で校正を引受けている小田垣さんらの努力にもかかわらず、経理状況は急激に悪化しつつあります。このため会員の負担増をお願いすることになるかも知れません。名ばかりとは云え、まだ発行人ですから、どうぞよろしくと申して筆を措きます。